能『鐵門』と能『大原御幸』から見た「生き残ること」の「かなしみ」と語ることについて

花園大学心理カウンセリングセンター　　宮　野　知　子

1. はじめに

日本では、昨今東日本大震災や熊本地震など、自然災害によって尊い命が失われることが増えている。科学技術が発達した現代では、「死」はどこか他人事のようになっているが、このような自然災害が起こるたびに、人の命の儚さやいつ自分の生命が途絶えるかわからない不安や恐怖を感じたりする。「死ぬこと」は当たり前のことだとわかっていても、どこか自分にはまだ先の話だろうと考えてしまうところがある。「死ぬこと」を考えることは、なぜこれ程日常の中では置き去りにされるのであろうか。

仏教では生老病死には苦がつきものであると言われている。老いること、病になること、死ぬことが苦であるというのは納得がいくところもあるが、そこに生きることも入るのはなぜであろうか。生きることの苦とは。それは、愛する人あるいはものと別れる苦しみなのかもしれない。愛する人とは何も恋人だけではない。家族や友人、恩師、仕事の仲間など様々である。愛別離苦。気持ちを傾けたものや人との別れは悔しく、寂しく、いたたまれない。愛すれば愛するほど離れがたく、別れがたくなる。「生きること」は誰かあるいは何かの「死ぬこと」を見届けながら生き続けねばならない。「生きる」ためには「死」を見なければならないのである。「死」を想像することは人間にしかない思考能力である。その「死」が不条理であればあるほど、生き残った人はその「死」の辛さと自分がなぜ生き残ってしまったのかを考えてしまう。「生きること」も「生き残ってしまった」と感じれば、地獄にいるのと同じような心境になるのではないだろうか。人は突然でいつ来るかわからない死の不条理を受け容れるために、生きるための支えを必要とした。そのため、「生きる」こと、「死ぬ」ことを考えるために宗教を必要としたのではないだろうか。

2. 能と心理療法

能は今からおよそ650年前の室町時代に世阿弥によって大成された日本の芸能である。能を大成させた世阿弥は連歌や禅の影響を受けながら能という芸能を芸術という域まで洗練させた。そのため、能の台詞である詞章は禅の影響を多分に受けて作られており、その内容を考える上では禅の思想なども含めて考えていかなければならないところがある。しかし、禅について門外漢である筆者には能と禅について語るだけの知識はない。ただ、能の夢幻能の形式である亡霊劇は勧進聖たちの勧進興行から始まっており、能の物語の発生には宗教と結びついている点があることは、能の内容を考察する上で押さえておかなければならない点である。

一方、心理療法では、自分の身に起きた出来事を自分なりに納得し、「語る」中で、その人なりの自己表現をしていく場を与えられることでもある。その自己表現を支えている背景には、知らず知らずのうちに宗教的なもの、あるいは宗教性の支えを得て、出会った出来事に自分なりの意味を見つけてクライアントは心理療法の舞台から退いていくのではないだろうか。心理療法の面接の舞台に立つクライアントは、日常の中では表現しきれていない「なぜ？」と不思議に思う出来事に対する自分なりの答えを表現

しようと必死にもがきながら、地獄のような想いをする方もおられる。そこには能のシテ（主人公）が表現するような苦悩もあれば、悲しみもあり、生きることや死ぬこともテーマとなる。深い悲しみに身を置くクライアントが、「なぜ生きるのか？」という問いを抱えて心理療法に訪れる際には、その答えには宗教的なもの、あるいは宗教性が立ち現われて来なければ、いくら正しい答えだったとしても、あるいは他の人が納得できる答えだったとしても、当の本人はそれが心に響かず、前に進むことすらできなくなるのではないだろうか。能『鐵門』や、能『大原御幸』では、その「なぜ生きるのか？」「なぜ死ぬのか？」と言った、宗教的な問いが含まれた内容になっていると共に、「死ぬこと」あるいは「死」の持つ残酷さや不条理さ、そしてそのような悲しみを持つ人間の儚さが表現されている。

3. 能『鐵門』と能『大原御幸』について

まず、ここでは能『鐵門』の内容と能『大原御幸』の内容を抑えておきたいと思う。能『鐵門』と能『大原御幸』を選び、比較対象とした理由として、能『鐵門』は鎮魂の要素が含まれており（西野、2017）、能『大原御幸』にもシテ（主人公）の鎮魂の要素が含まれた内容となっている。また愛する人を失った人物が主人公となっているという二つの共通点がある。しかし、能『大原御幸』は仏教という宗教の信仰心が強い時代に描かれている作品であるため、現代人とは若干死生観が異なっている可能性もあった。そのため、同じように愛する人を失った体験をしたシテが登場し、明治以降に作られて西洋文化の影響を受けている時代背景を持ち、より現代人の死生観に近いと考えられる、能『鐵門』を比較対象とすることで、「生きること」や「死ぬこと」をどのように捉えるか、また、愛する人を失くした人の「生きること」の意味の再構築の在り方を探っていくこととした。能『鐵門』に関してはまだ研究がそれ程進んでいないため、筆者の類推による考察が多くなってしまうところがある。しかし、近代以降の死生観を見た際に、「生きる」ことや「死ぬこと」を宗教との絡みでどのように考えるようになったかを能『鐵門』を通して考察することは現代人が生きる上でも多くの示唆を与えてくれると考える。また、能『大原御幸』は能の演目の中でも語り物と言われる種類の演目であり、シテである建礼門院の語りが大きな見どころになっている作品である（金子、2001）。作品が作られた時代は古いが、人が愛する人を失くし、抗いがたい運命の中でどのように生きて、それを物語るかを見ていく上では多くの示唆を与えてくれるテキストとなると考えた。能『大原御幸』のシテ（主人公）である建礼門院の語りには現代とは少し様相の違った死生観が語られるかもしれないが、愛する人を失くす「かなしみ」はいつの時代でも普遍性のあるものと考え、考察することとした。

1）能『鐵門』

①能『鐵門』が作られるまで

能『鐵門』は俳人である高浜虚子が創作した能である。高浜虚子は、ベルギーの作家メーテルランクが作った戯曲の一つである『タンタジールの死』から着想を得て能『鐵門』を創作した。能『鐵門』は、姫に叶わぬ恋心を抱き、その姫の死によって失った衛門の翁の悲恋と妄執の劇となっている（西野、2017）。能『鐵門』で強調されているのは、愛する者との死別による別れと、残された者の悲劇が表現されており、「鐵門」という「死」を象徴する門によって愛する者同士が突然門を隔てて引き裂かれてしまう様が描かれている。高浜虚子がこの『鐵門』を創作した背景には、娘の死があったようである。幼い娘の死に対して納得するために能の表現を通して、「生きること」や「死ぬこと」を彼なりに表現したかったのかもしれない。能の詞章の中には「生死の理」という詞章もあり、そこに

はわが娘の死に対する問いもあるのかもしれないが、それと同時に「生きるとは？」という問いや､「死」の不条理への問いかけもあるのである。

②物語のあらすじ

ワキである僧が善光寺に詣でて、アイ（間狂言）である門前の者に暗穴道について尋ねる。ワキとアイは暗闇の中を二人通っていく。暗穴道の道中で、姫の霊と衛門の介の霊が現れる。二人は生死の謎の鍵のことを教え、その鍵は生死を分かつ鉄の門の鍵であるが、生死の謎を解くことは永遠にできないと言う。衛門の介は昔を語りだし、城にいた姫を一人守っていたが、悪尼に姫を連れ去られてしまい、鐵門を隔てて会えなくなってしまったことを語り、姫への妄執を語り、僧に助けてほしいと言って消えるという内容になっている（西野、2016）。

③暗欠道について

能『鐵門』に出てくる暗穴道は高浜虚子による創作であるが、暗穴道という言葉は、『平家物語』の中に出てくる言葉でもある。『平家物語』（古川、2016）によれば、暗穴道とは、阿闍梨、祐慶が玄宗皇帝の后楊貴妃との噂による醜聞によって果羅国へ流罪となった時に、その国に行くための道の一つのことで、重い罪を犯した罪人が通る道のことである。阿闍梨、祐慶がこの暗穴道を通った際、無実の罪を被せられた祐慶に憐れんだ神が九曜の星の形を現わしてその光によって祐慶を守り、祐慶は自分の指を引きちぎって自分の血で九曜の形を描き写した。これが真言宗の本尊・九曜曼荼羅となったという記述などがあり、暗穴道には、人の犯した罪による神と人との接点、あるいは人の心の迷いや闇を映し出すような記述が含まれている。また、能では弱法師でも暗穴道について述べている箇所があり、シテの弱法師が暗穴道について述べる前に、人の心の迷いや心の闇について述べている箇所がある。このように、暗穴道は、人の心の闇や迷いを象徴するものであると考えられる。では、善光寺の暗穴道は作者である高浜虚子による創作であるが、ここで、ワキの僧はなぜ善光寺に詣でて暗穴道について尋ねるのであろうか。ワキの僧は何か罪を犯したのであろうか。もし罪を犯しているとすれば、どのような罪だと考えるのであろうか。高浜虚子が娘の死の後にこの作品を書き、実際に高浜虚子自身が舞台でワキを演じたこと（横道、1987）を考えると、ワキの抱えている背景に自らの体験を重ね合わせた可能性がある。もしかすると、ワキが暗穴道を通らねばならなかった理由は、わが子よりも長く「生き残ってしまったこと」への高浜虚子自身が抱いた罪の意識だったのかもしれないし、心の迷いや闇を表現したかったのかもしれない。そして、ワキがシテと出会えた背景には、シテである衛門の介の霊も同じような体験、つまり姫よりも長く生き残ってしまったことに対する罪の意識を持っていたからこそ出会えたのかもしれない。そして、同じ体験をしている者同士であるからこそ、衛門の介も助けて欲しいと語れたのかもしれない。暗穴道は、悟りに至れない、仏の救いの光を全く受けられないような、生きることの「かなしみ」を象徴する道として、物語の中で表現されているのである。

④鐵の門の鍵について

次に、物語の中で、象徴的に述べられている、鐵の門の鍵とは、一体、どのように考えるべきであろうか。鍵は、道の真ん中にあり、それを見つければ極楽に行けると語られている。暗穴道を人の人生として例えているのであれば、道の半ばにある鍵というのはどういうものであろうか。その鍵というのは生死を分かつ鍵であるだけでなく、悟りを得るための鍵である可能性もあるのでないだろうか。道半ばで往きつ、戻りつする中で、人が暗闇の中で悟りを得る、つまり鍵を得て生きることにも死ぬことにも隔たりがなくなるのかもしれないし、あるいは、悟りを得れば鐵の門つまり生死を分かつびくともしない門に阻まれて世に恨みを残すこともないのかもしれない。しかし、それは、「永遠の謎」

として表現されている。そしてシテである衛門の介は「生死の鍵は置いといて」と述べてから、自分の昔を語り始める。鍵を生前得られなかったからこそ、シテは鍵のことは置いておかなければならなかったのではないか。そのため、シテはワキに鍵を見つけてもらいたいと思い、自分の昔を語って救って欲しいとワキに頼んだのかもしれない。

2）能『大原御幸』について

能『鐵門』以外にも、最愛の人に先立たれてしまう悲運を語っている能がいくつかある。その中でも、能『大原御幸』は、歴史上の人物でもある建礼門院を主人公にして、その身に起こった出来事を語っていく語り物の能である。馬場（2009）によれば、“ 能『大原御幸』（小原御幸）は平家滅亡の後建礼門院が洛北大原の寂光院に隠棲して、一門の菩提を弔っているところに後白河法皇の御幸があって、女院は西海の軍陣に伴われて体験した酷薄非情な戦の実相を語るという大曲である ”。また、仏教的無常観に貫かれた一大叙事詩『平家物語』の最終巻「灌頂巻」に取材した作品でもある（金子、2001）。『平家物語』の最終巻「灌頂巻」は、『平家物語』においては鎮魂と深く関わっており（吉田、2015）、大原御幸に関しては、史実としての記録がはっきりしていないため、虚構を含んでいる可能性はあるものの、建礼門院に対する鎮魂を図ったとも捉えられる内容となっている（吉田、2015）。そのような観点から、能『大原御幸』を見ていくと、語ること、あるいは「物語ること」と、鎮魂とは密接に繋がっていると考えられる。能『大原御幸』では、建礼門院であるシテが平家の滅亡と我が息子である安徳天皇が入水して自害する様をツレである義父後白河法皇に語る内容となっており、その凄まじいまでの体験を、観客の前で語る様が見どころの能となっている。馬場（2010）は、シテである女院の語りについて “『平家物語』に拠った能の語りは六道すべて経めぐり生還した人の体験としてリアルな感銘を加えている ” とし、様々な体験をして生き残った人の語りの重さや悲しみの詠嘆を述べている。また、初夏の頃の季節の時鳥の初音や、池の汀に寄せる桜花などの情景も描かれており、その穏やかな情景と対比するかのような建礼門院の地獄絵図を語るような語りは、建礼門院が背負ってしまった人間の残酷さや生きることの凄惨さなどを際立たせている。外界が穏やかであればある程、建礼門院の内界の凄まじさや、それを抱えながら生きることの悲しさを映し出している。それは、外界と内界の陰影の差を色濃く感じさせることで、建礼門院の内界の闇の深さを表現しているようでもある。時代の流れに翻弄されて、権藤（2009）の言うように、“ 運命のもてあそぶままに、全く無抵抗に生きた女の一生 ” として見ることもできるかもしれない。それほどまでに、建礼門院の運命は凄まじく、自分で抗うことのできない程の運命を背負わされていたのかもしれない。特にわが子である安徳天皇が入水して自害する様を語る＜語り＞の部分は、子どものいる母親であれば、語ることさえ、自分の心が壊れてしまうのではないかと思うような体験として感じられるかもしれない。それでもツレである後白河法皇が建礼門院に語らせようとしたことは、どのような意味があるのであろうか。建礼門院のような体験をすることは現代では稀になっているかもしれない。しかし、人は必ず「死」を体験する。その「死」の体験を迎えるまでは、「生きて」いかなければならない。能『大原御幸』のシテである建礼門院の語りを聞くと、「生きる」こともまた地獄なのかもしれない。しかし、それを、語ることもまた、人が「生きる」上で必要なことなのではないだろうか。

3）能『鐵門』と能『大原御幸』の「生き残る体験」

能『鐵門』も能『大原御幸』も共に愛する人に先立たれてしまい、生き残ってしまったということが同じテーマとなっている物語であると

いえるかもしれない。しかし、能『鐵門』のシテが最後に救いを求めている一方、他方能『大原御幸』のシテは救いを求めることなく、ツレである後白河法皇を見送り寂光院にある平家一門の菩提を弔っている。亡霊として出てきた能『鐵門』のシテと、まだ生き続けている能『大原御幸』のシテでは、既に亡くなってしまった人と仏門に入っている人とでその心境に差があるのかもしれないし、西洋文化の影響を受けた近代になってから書かれている『鐵門』と室町時代に書かれている『大原御幸』とでは、死生観について随分変わっているかもしれない。しかし、能『大原御幸』のシテは、死後亡霊として現世に出て来て、見ず知らずの人間に助けを求めてくるだろうか。能『鐵門』のシテが、亡くなった後も亡霊となって姿を現わしたのは、生前に能『大原御幸』の建礼門院のように、誰かにその悲しみを語れなかったからこそ、愛する人を思うように弔うことが出来ず、死後も未練が残り、亡霊となって表れたのかもしれない。亡霊となって姿を現わしたことが、愛する人を失くし生き残った人間として、死者の弔いが済んでいないこと、つまり自分の「生きることとは？」という問いを含んだ、「どう死ぬか」への答えに納得していないことを表現しているのではないだろうか。そのため、死んでもなお、能『鐵門』のシテである衛門の介はワキである僧の前に現れ、救いを求めているのではないだろうか。能『鐵門』では、鉄の門によって生死が分かたれるが、それはいつ、どのように分けられるかは人間の知る余地のないことである。そのような“いつ”死ぬかわからない死の不条理は、能『大原御幸』のシテである建礼門院のように世の栄華を極めた、非日常を体験した人間だけが経験するものではない。日常を日々淡々と過ごしている現代の人々にも死の不条理は突然やってくるのものではないだろうか。その突然の愛する人の「死」によって、日々考えることのなかった「死」を、あるいは抑圧していた「死ぬこと」を愛する人の「死」によって、「いかに死ぬのか、そしていかに生きるのか」という問いを突き付けられてしまうのである。

4. 生き残ることの意味と罪悪感

1）能『鐵門』と能『大原御幸』から見た生き残ることと罪悪感

では、能『大原御幸』のシテである建礼門院のように偶然にも生き残ってしまい、生き長らえねばならなくなったと感じた時に、人はどのようにしてその後の人生を歩んでいくのであろうか。愛する人の死を受け入れるために、死を見届ける人の喪の作業（グリーフワーク）も考える必要はないだろうか。例えば、末期がんと闘う愛する人の死の際を見つめる人や、自死を遂げた人の亡骸を送る人、不慮の事故や災害で家族を突然奪われた人などの悲哀の受容を考えることも心理臨床に携わる人間として大切な作業であると思われる。また、そのような喪の作業（グリーフワーク）をセラピストが共に居続け、クライアントから話を聴くことは、時にクライアントが生前の人物について語り、その人物がどのような想いを持っていたのだろうかと、その人を「思い出す」ことが一つの弔いになるのではなのではないだろうか。東日本大震災の後に、岩手県大槌町には風の電話という、想いを話す場所が作られた。想いを伝えたい人に繋がっていない電話を通して伝えたい想いを話すのである。そこでは、「思い出した」故人について、繋がっていない電話に向かって語りかけ、対話をする一時を持つ。誰かに語るのではなく、自然の中で自ずと「思い出した」誰かについて語る作業は、「思い出した」誰かを弔うだけでなく、電話に向かって語る人にとっての鎮魂や祈りにもなるのである。風の電話について描いた絵本、『かぜのでんわ』（いもと、2014）には、次のような一文がある。

“ねこさんはいのるようにじゅわきをとりました。「もしもし、かみさまですか？　かみさま、おしえてください。ひとはなぜしんでしま

うのですか？　なぜうまれてきたのですか？　いきるということ、しぬということは……　どういうことですか？　おしえてください……かみさま」”

能『鐵門』を創作した高浜虚子も、もしかすると、ねこさんと同じような問いを心の中で叫んでいたかもしれない。「生死の謎」はかみさましか知らない、永久の謎なのである。しかし、その生死の謎にその人にしかない意味を見出して行かなければ、前に進めない時もある。そのような時に、ねこさんが言ったような「なぜ生まれてきたのですか？」という「生きること」の問いが立ち現われてくる。そこには、「生きること」の意味を見出さなければ、愛する人の「死」を見届けた人間の悲しみは受け止められない辛さもあるのだろう。目を背けたくなるような残酷な光景も見なくてはならなかったのかもしれない。そのような、生きていくことと表裏一体となっている、死ぬことを直視することは、目を覆いたくなるような現実を直視することへの恨みや、恐れがあって当然である。そのような目を背けたくなるような感情や光景を見ながらも生き長らえなければならない時、暗穴道を通るような光の無い真っ暗な暗闇の中を進まなければならないのかもしれない。高浜虚子が描きたかったものは、「死」の不条理だけではなく、「死」の不条理に出会った時の人間の儚さと悲しみの深さを表現したかったのではないだろうか。そして、そのような深い「かなしみ」を背負った時に、人は「語る」ことが必要になることも能『鐵門』や能『大原御幸』は教えてくれるのである。

2）生き残ったことの「負い目」と罪悪感

能『鐵門』では、悪尼という死の使いに鉄の門の中に連れて行かれてしまった姫を助け出そうとしたシテの衛門の介が、死んでもなお姫への妄執を語り、この苦しみを助けてくれと語る。しかしその「苦しみ」とは、何であったのか。姫への妄執が晴れないという気持ちとはどのようなものであったのだろうか。能『鐵門』では、“先立つ姫を悲しみの。その執心の残り来て。浮かむ瀬も無し恥ずかしや”というシテの衛門の介の言葉がある。年齢を考えれば、老いたシテである衛門の介が先に死に往くことが道理であるのであれば、この言葉は、自分より先に姫が亡くなってしまうことは悲しく、道理に合わない出来事に出会ったことで、考えることは日々悲しみにとらわれてしまい恥ずかしいという意味なのかもしれない。そして、悪尼という死の使いに連れ去られてしまうこと、つまり予測不可能な出来事によって、まだ死ぬはずのない人の命が絶たれてしまうことは、生死の謎であり、生死を分かつ門、つまり生死を分けるような出来事に出会ってしまうと、どんなに智慧を絞ってもその生死を人の力で変えてしまうことができないという人間の限界と、“在りし世の恨みぞ残る”と表現されるような人間にはどうすることもできない運命を恨む気持ちが表現されているのではないだろうか。そして、その運命を受け容れなければならないと思っていても、受け入れられない自分を“恥ずかしや”とシテの衛門の介は語っているのかもしれない。そのため、シテの衛門の介はその自分の運命を受け容れるために、ワキである僧に出会い助けてくれと言わなければならなかったのかもしれない。そこには、人の死は予測不可能であるために理不尽で不条理な面があり、シテの衛門の介にとっては「なぜ死の使者に連れ去られるのが姫でなければならなかったのか」という問いもあるのかもしれない。そして、姫を守れなかったことの「負い目」や罪悪感もあったのかもしれない。その罪悪感には、杉原（2010）が言うように、自己他者境界の拡散によって、人の不幸を前にして、それを他人事にできない心理もあったかもしれない。しかしそれと同時に、大切な他者を失くしてしまった喪失体験が自分の身体の一部をもぎ取られるような悲しみとして体験されたのかもしれない。その悲しみが、「生きる」ことの意味を考え、今ある命を全うしよ

うとする考えよりも、「死ぬこと」で亡くした人との一体感を得たいという欲求にすり替えられることもあるのではないだろうか。能『大原御幸』のシテである建礼門院は、息子である安徳天皇の入水を見届けた後に、自らも海に身を投じている。安徳天皇の母であった建礼門院にとっては平家の一門の滅びゆく「かなしみ」よりも、わが子がどうしようもない運命の悪戯によって自ら命を絶たねばならなかった「かなしみ」の方が強かったのではないだろうか。わが子という、愛する人を失うことは自分の体の一部を失うような喪失体験を伴うため、自己他者境界を失う体験としては十分だったのではないだろうか。能『大原御幸』のシテである建礼門院と、能『鐵門』のシテである衛門の介は、自分が先に死ぬであろうと考えていた道理に反して、死の不条理によって自分より若い愛する人を失った点で同じ体験をしているのである。では、それ程までに強い「かなしみ」を抱いた人間が、再度「生きる」意味を見出すためには、どうすれば良いのであろうか。

5. 生き残ることの「かなしみ」と語ること、語り継ぐこと

「生きる」ことさえ地獄であると感じている時に、人はどのようにして「生きる」希望を見つけ出すのであろうか。「死んでしまいたい」、「生きていることが辛くて仕方ない」「生きていてもいいことがない」など、様々に生きることを否定する言葉がこぼれ落ちるかもしれない。しかし、そのように「語れる」ことが、「生きる」上で何よりも大切なのではないだろうか。人は美しく、綺麗な感情だけでは生きていけないし、されど、醜く、卑しい感情だけで生きているわけでもない。時に、耳を塞ぎたくなるような醜い感情でも、生きていく上では語る中で向き合わねばならない時もあるはずである。能『鐵門』のシテである衛門の介は、“在りし世の恨みぞ”と言って恨む気持ちを語り、能『大原御幸』のシテである建礼門院は、息子である安徳天皇の入水について語る際には“恨めしい”と衛門の介と同じように恨む気持ちを語っている。何かを恨む気持ちがその気持ちをもつ主体に能動的に働けば、そのエネルギーは恨む世の中を変える方向に進むかもしれないし、あるいは、恨む気持ちさえ儚く、受動的なものであれば、それは建礼門院のような静かな諦めの気持ちとなるのかもしれない。どちらも恨む気持ちではあるが、納得できず亡霊となって助けを求めるか、静かに受け止めて諦めるか、その気持との付き合い方は様々である。しかし、醜い気持ちを抱えながら生きることは地獄を見るような辛く苦しい生き方となる。誰でも、清く美しく生きていきたいと思い、それが正しいことであると信じている。しかし、人の「死」という恐ろしいものを見て、清く美しくあることの難しさを知ることになる。それは、半ば、自分はまだ「死」を体験せずに済んでいる安堵感と愛する人の死に触れてそう感じてしまう罪悪感との葛藤なのかもしれない。

生き残ることの悲しみはどのようなものであるだろうか。そこには自らが「生きること」と「死ぬこと」をかんがえるだけではなく、自ずと「なぜ生きるのか」、「なぜ死ぬのか」という問いを投げかけられることでもあるのではないだろうか。それは答えの出ない問いを投げかけられることであり、深い宗教的あるいは哲学的な問いを与えられる出来事でもある。そして、深い悲しみは「どう生きるか」と、全存在を賭けた問いを投げかけてくる。禅の公案を投げかけられるような問いに人はどのように答えを求めていくのか。それが個性化の過程であるのかもしれない。そして、「どう生きるか」を身を持って体現することが、生き残った人間が故人を弔うことになるのかもしれない。そして、体験を共にした人にその出来事を語り継いでもらうことも、その出来事によって「死」の運命を受け容れざるを得なかった人にとっての弔いとなるのではないだろうか。しかし、あまりにも深い「か

なしみ」には、語れるようになるまでには長い時間がかかる。生き残ってしまった罪悪感が強ければ強いほど、自分は間違ったことをしたのではないかという自分への疑いや不信感も強くなる。サバイバー・ギルトについて述べている Patricia（2005）によると、サバイバー・ギルトを抱いた人は、「なぜ」と自問自答したり、自分自身の存在意義や命の意味を問い始めるようになる。これは、不安や自己不信、などに及ぶ。「なぜ私は生き残ったのか」「なぜ私ではなくあなただったのか」という「なぜ？」という問いに答える術は誰にもない。答えのない物語だからこそ、言える相手に「語らねばならない」のかもしれない。そして、「語る」中で、「死」という辛い記憶だけでなく、亡くなってしまった人の生きていた証を見つけることが故人への弔いになるのではないだろうか。「生きた証」とは時として自分の存在を見つけてくれる人であり、例え現実に存在することはなくなっても心の中で恒常的に存在するようになること、つまり対象の恒常性を心の中で獲得することで、辛い記憶だけが蘇るのではなく、それ以上に愛着を持っていた対象を「懐かしい」と思える思い出へと変化することができるのではないだろうか。対象が喪失したことを受け容れる「喪の作業」を経ることは容易なことではない時もある。それでも、生き残り、踏み止まった者としてその命を生き切ろうとする時に、いつしか、失くしたと思っていたものが実は心の中に存在したと感じる時も出てくるかもしれない。亡霊として出て来た能『鐵門』のシテである衛門の介ももしかすると誰かに見つけてもらい、見つけられることで自分の人生を「物語る」機会を得て、「生きていた証」を残していきたかったのかもしれない。もしかすると、人は誰かの心の中に自分の存在が映っている、有るのだと感じた時に、「生きる意味」を感じ、癒されるのかもしれない。誰かの「死」を見届けた人間は、その「死」を忌むべきこととして蓋をするのではなく、時間の経過を経る中でその人物が「生きた証」を「生きて語り継ぐ」役目を担わされるのかもしれない。だからこそ、「死」は、それを見た人に「どう生きるか」、「どう生きた証を残すのか」と「問う」のかもしれない。仏教では、人が亡くなってから初七日、四十九日、一回忌、七回忌など、節目節目に死者を思い出し、弔う機会が設けられている。そのような節目の機会に故人を偲ぶ人たちが集まり、故人との懐かしい記憶を語り合うことも、生き残ってしまったことの罪悪感や、故人の生きた証を語り継ぐ役目を皆で分かち合い、共有する機会となっているのではないだろうか。能『大原御幸』のシテである建礼門院が生きた時代は、まだ仏教の信仰心も篤く、死後も極楽往生が約束されていた時代であった。そのため、「死ぬこと」を現代程恐れることはなかったかもしれない。しかし、西野（2017）の言うように、仏教の往生の観念も近代以降の西洋文化の影響を受けて、能『鐵門』に表現されている死生観と同じように現代人の死生観も揺れ動いているのではないだろうか。仏教などの宗教への拠り所を希求しながらも、科学によってより多くの知見を得るようになった現代人は、「生きる」意味や、「死ぬこと」への問いを考えるだけの時間を作ることが困難になっているのかもしれない。しかし、自然の中で季節の移ろいを感じたり、野道にタンポポが咲くのを愛でたりする中で、命の輝きと人の一生の儚さを感じたりする時もある。日本人が散る桜を見て、言いようもない「あはれ」の感情を生起されるのも、冬の寒さを忍び、春が来るのを「待って」花が開く様を見て、田村（2011）が言うような“二度と同じかなしみが繰り返されないように”と願う秘めた祈りが捧げられながらも、その想いもまた季節の移ろいの中で散っていくという、「無常観」を感じて、人間の儚さや、生きること、死ぬことの謎を感じ取るのかもしれない。平家物語の冒頭にある“ただ春の夜の夢のごとし”という一文は、平家一門の栄華だけでなく、人の一生の儚さや「かなしみ」も表現しているのである。

6. おわりに

筆者は十代の頃に阪神淡路大震災を経験し、被害はほとんどなかったが、学校には避難してきた生徒がいたり、親せきが被災したりするような形で間接的に生き残ったと感じる体験をした。そして、東日本大震災をニュースで見た時に、阪神淡路大震災のことを思い出すことも多かった。どちらも直接被害を受けたわけではなかったが、それでも何もできずにただテレビを見続けて日々を過ごす毎日はとても居た堪れない感じがあった。自分には何もできないと思う気持ちが出て来て、やり切れなかったのを覚えている。周囲の活動的な人の中には福島に赴いて被災者のケアを行った人もおり、行動できる人が羨ましいと思った時もあった。できることは少ないながらも、東日本大震災の出来事を自分の中で他人ごとにできない気持ちがこの論文を書くきっかけになったのかもしれない。国文学や歴史、仏教にも知識のない筆者が本論文を執筆することは甚だ心許ないものであったが、少しでも被災された方々の気持ちや愛する人を亡くした経験のある方々の気持ちに寄り添えればという想いで最後まで書くことが出来た。もし、能『鐵門』を書いた高浜虚子が東日本大震災を経験していたなら、鎮魂のための能をどのように書いただろうかと考えながら、生死の謎をもう少し考え続けてみたいと思う。

謝辞

本論文を書くに当たり、能『鐵門』の謡曲本を提供して頂きました能楽師の先生には大変お世話になりました。この場を借りて深湛の謝辞を表します。また、東日本大震災を始め、熊本地震で被災された方々や愛する人を失くした方々に対して深く哀悼の意を表します。

文献

馬場あきこ子（2009）:読んで愉しむ能の世界　株式会社淡交社　pp228-229.

土居　健郎（2001）:甘え・病い・信仰　株式会社創文社

古川日出男（訳）（2016）平家物語　池澤夏樹＝個人編集　日本文学全集 09　pp91-92. pp850-873.

権藤芳一（2009）:鑑賞の手引き能舞台の主人公たち　株式会社淡交社 pp.202-pp207

飯島勝矢（2012）:災害時高齢者診療の今後の課題：東日本大震災から学んだもの　日本老年医学会雑誌，49，(2)，特集　被災地における高齢者医療　pp164-170.

いもとようこ（2014）：かぜのでんわ　金の星社．Pp11-12..

金子直樹（2001）:能楽鑑賞百一番 . 岩田アキラ写真 .　株式会社淡交社

河合隼雄（1995）:ユング心理学と仏教．岩波書店

村上　湛（2007）:すぐわかる能の見どころ―物語と鑑賞 139 曲　株式会社東京美術

西野絢子（2017）:『タンタジールの死』から『鐵門』へ：虚子によるメーテルランク翻訳能　慶應義塾大学日吉紀要．フランス語フランス文学，64，117-136.

Patricia Underwood（2005）：Survivor's Guilt: Understanding the Aftermanth of Disaster 増野園恵（編）．ウィリアムソン彰子（翻訳）日本災害看護学会誌別刷，7, (2), 23-30.

多田富雄（2005）:ほたるの本　あらすじで読む名作能 50　株式会社世界文化社

高浜虚子（2016）：鐵門　西野春雄（監修）　公益社団法人京都観世会 pp1-3.

田村知子（2010）：能からみた「うらみ」の感情 . ―謡曲「井筒」と「葵上」との比較を通して―. 京都文教大学　臨床心理学部研究報告　第 2 集 pp75-88.

杉原保史（2006）:日常生活におけるサバイバーズ・ギルド―負い目による自己他者境界の不明瞭化―．大谷学報．76．(1)．

the 能ドットコム編集部（2016）：大原御幸／小原御幸（おはらごこう）　カリバーキャスト

the 能ドットコム編集部（2017）：弱法師（よろぼし／よろぼうし）　カリバーキャスト
横道萬里雄　西野春雄　羽田　昶（1987）：能の作者と作品　岩波講座　能・狂言Ⅲ　岩波書店　pp314-323.
吉田后希（2015）：『延慶本平家物語』における大原御幸考 .　神戸大学国文学研究ノート . 54.　pp30-44..